

# 〈呪術と合理性〉再考

——東京都23区民意識調査にみる宗教的コスモロジーと行為の関係——

荒 川 敏 彦

## Rethinking the Relation between Magic and Rationality : From the View of the Relation between Religious Cosmology and Behavior

ARAKAWA Toshihiko

### 1. 「呪術」の手段性

本稿は、2006年1月に東京23区民1200人を対象に行われた生活意識調査<sup>1</sup>（以下MGC・IIと略記）で得られたデータをもとに、（1）現代日本社会において人びとが抱く宗教的コスモロジーと現実の行為との関連を考察し、それを通して（2）「呪術」をめぐる合理／非合理的の価値判断の混入しがちな実体的認識を相対化する試みである。

21世紀の世界は、宗教衰退の傾向を指摘した「世俗化」の想定に反して、むしろ「宗教」的要素の政治的、経済的、文化的な影響力が表面化し、その重要性を無視し得ない状況を迎えていると言ってよいだろう。現代社会に生きる人びとが宗教的世界像に動機づけられて行動する、あるいは宗教的世界像を現世の社会的紐帯の基礎として行為するというとき、では現実の宗教的行為が、どの程度までその宗教性を基礎づけるコスモロジーと関連しているのだろうか。本稿ではこの宗教的コスモロジーと現実行為との関連を、より狭く「呪術」的な行為に焦点をあてて考えてみよう。

ここで「呪術」というのは、「何らかの目的のために超自然的・神秘的な存在（神、精霊その他）あるいは霊力の助けを借りて、種々の現象をおこさせようとする行為およびそれに関連する信仰・観念の体系」<sup>2</sup>というほどの意味で、「術」性つまり「手段」性に着目した宗教的行為を指す。たとえばお守りの所持は、家内安全、交通安全、合格祈願、縁結び等々、ある目的を達成するための手段であろう。試合に勝つための験担ぎも、目標を達成するまでの酒断ち、茶断ちなどの禁欲もひとつの宗教的「手段」と考えられる。

では、それらの手段を選択した（あるいは選択しない）際、その行為は当の手段を基礎づける宗教的根拠と関連づけられているのだろうか。たとえばお守りの所持を選択した際、そのお守りの効力の源たる神や仏や守護霊の存在は信じられているのだろうか。あるいはお守りの「効果」はどの程度信じられているのだろうか。お守りを所持しているからといって、神を信じているとは限らないし、その効果を信じているとも限らない。逆に、神や仏を信じていないが、お守りを所持しているという場合もあるだろう。こうしてみると、(A) 宗教的観念に対する信憑や信仰、(B) その術（手段）の効果に対する信頼、(C) 現実の行為実践（たとえば、お守りの所持）の三要素がどのように関連し合っているのかは、興味深い問題であるに違いない<sup>3</sup>。考察の対象を手段性を基底とする「呪術」的行為に絞ることで、現代日本における宗教的意識と行為について、これら三要素の関係から分析的に考察可能になるように思われる。

## 2. 方法的合理性と「呪術」

「呪術」の手段性に注目することは、同時に「呪術」をめぐる「合理性」問題の考察という面を合わせもっている。思想的には、「呪術」は「宗教」および「科学」の視点からともに「非合理」とされてきたという経緯がある。すなわち「呪術」は、一方で近代社会を主導したとされる西洋キリスト教（「宗教」）の立場から異教の「非合理」な業であり排除の対象として構成され、他方で近代「科学」の立場からは誤った因果連関の認識に基づく「非合理」な行為とみなされてきたのである。「呪術」という概念は、「宗教」や「科学」という概念・領域が確立される「近代的」な知の領域争いの中で歴史的に位置づけられたものである<sup>4</sup>。そうであるなら、「呪術」の「合理／非合理」を本質的・実体的に捉える仕方が問われてくるだろう。

そこで、先の(A) 宗教的な基礎観念の信仰、(B) 効果信頼、(C) 行為実践の三要素の関連に着目し、この三者の首尾一貫性をもって「合理性」の基準として設定するならば、「呪術」と「合理／非合理」との関係を実体的ではなく方法的に思考することができるのではないだろうか。それによって、現代世界における認識枠組みを問い直すきっかけとしてみたい。

三要素の首尾一貫性とは、三要素（観念、効果、実践）が人びとの中でいかに組み合わせられているのかを問題にする視点である。たとえば、基礎的観念を信じ、その術の効果を信じ、そして実践をしているなら、それはきわめて一貫した態度であると、言うことができる。同様に、三要素いずれにも否定的な場合もまた、きわめて一貫した態度であるということになる。その中間には、観念も効果も信じていないが実践はしていたり、観念は信じているが効果は信じておらず、けれども実践をしていたりと、さまざまなタイプがあるだろう。つまり方法的には、観念と効果と実践がすべて一貫しているほど、首尾一貫性（すなわち本

稿での「合理」の度合いが高いといえる。逆に、各要素について相互に逆向きの指向を示す場合は、本稿の意味で「非合理」といえる<sup>5</sup>。

表1 三要素の形式的体系

基礎観念	効果信頼	行為実践
+	+	+
		-
	-	+
		-
-	+	+
		-
	-	+
		-

現実における有無はともかく、三要素の形式的な論理構成は表1のようになる（肯定的態度を＋、否定的態度を－として記号化した）。

このような合理性の方法的考察において、価値判断が脇におかれるのは言うまでもない。（観念、効果、実践）について（＋，＋，＋）が「良い」とか、逆に（－，－，－）が「悪い」といった判断は行えない。そのどちらも最高度の首尾一貫性つまり合理性を示しているからである。「合理」を首尾一貫性の形式によって位置づけ、非本質化することの意義のひとつは、そのような価値判断を排除することを容易にする点にある。

### 3. 呪術を基礎づける観念

考察の出発点は、呪術を根拠づける基礎観念が、どの程度まで信じられているかという問題である。たとえば、現在も新築現場などでよく見かける地鎮祭は、神道の「神」と関わらせて成立する「呪術」的（つまり目的手段関係に依拠した）行為であろう。それはひとつの「術」であり、祝詞が神に向けてあげられていることを考えれば（多くの一般人が祝詞の内容を細かく聞いているとは思えないが）、この場合の基礎観念は前提としての「神」と言えよう。また自分の幸多きことを祈って、つまり現世利益のために「念仏」を唱えるという行為も、「仏」を想定してはじめて成立するものだろう。

MGC・Ⅱでは、このように呪術的行為を基礎づける観念、ないしはそれに関わる現象について、「ありうる」「どちらかといえばありうる」「どちらかといえばありえない」「ありえない」のなかからひとつを選んでもらった。その集計結果が図1である<sup>6</sup>。

この単純集計から、「ありうる」「どちらかといえばありうる」を合計した存在肯定派は、9項目中「生まれ変わり」を除く8項目で過半数に達していることが分かる。とくに「運」「ご縁」「直感」などの、既成宗教との関連が必ずしも読み取れない事柄については、その存在が「ありうる」と積極的に肯定する意見が4割以上と多い。また、「縁起」「生まれ変わり」「自然の霊」「守護霊」「神や仏」などの観念については、積極的に肯定する意見は相対的に少ないが、消極的肯定も含めれば、「縁起」「神や仏」なども高い割合で肯定されている。

興味深いのは、積極的肯定が多いとは言えない「守護霊」や「神や仏」「生まれ変わり」などの観念に対する肯定感が、祈願の効果への意識と密接に関わっている点である。次にそのことについて触れておこう。

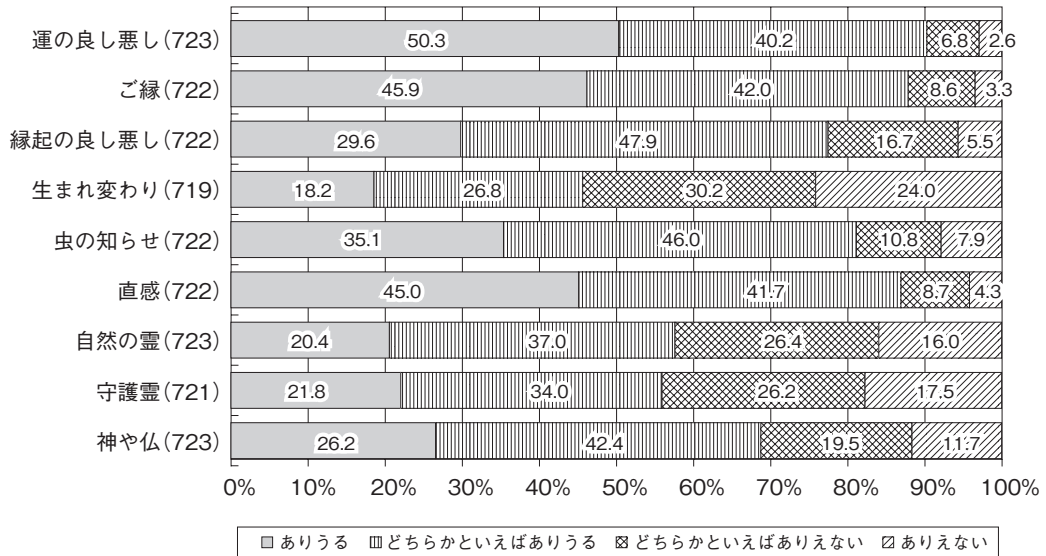


図1 基礎観念の信仰

#### 4. 術の効果に対する信頼

MGC・Ⅱでは、祈願行為の「効果」がどの程度信じられているか、「効果がある」「多少は効果がある」「効果はあまりない」「効果は全くない」の中から1つ選択してもらった。すなわち、A. 願いが叶うまでの禁欲（酒断ち・茶断ちなど）、B. テレビの生中継を見て、スポーツの応援をすること、C. 絵馬を奉納する、D. 念仏・お経をとる、E. 悪いことが起きたとき、お祓いをしてもらう、F. 呪いをかけること、あるいはかけられること、の6項目である。まずその集計結果を図2に示しておこう。

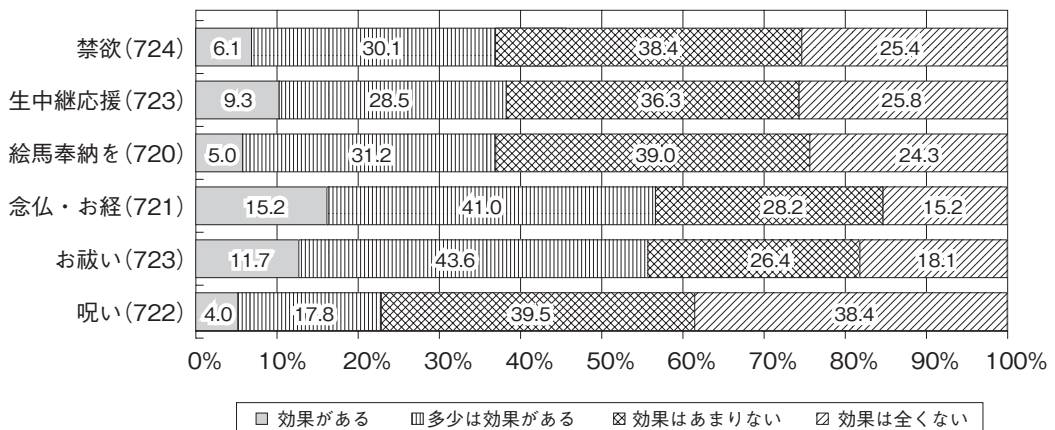


図2 祈願効果への信頼

図2から、「念仏・お経」や「お祓い」という伝統的な手法の効果が信じられている割合

の高いことが分かる。「禁欲」は試験勉強やダイエットなどから察せられるように、目標達成のために障碍となる欲求を抑制することが実際的な効果として期待できるという見方もある。「生中継の応援」も「禁欲」とほぼ同様の信頼を集めていることは興味深い点である。「呪い」は手段としての効果信頼は高くはないが、「呪い」をかけられるということについても含めて考えたとき、効果あり・どちらかといえば効果ありとする肯定的回答の合計が2割を越えている点は注目してもよいだろう。

またMGC・Ⅱは、「おみくじの結果」や「北枕」「厄年」など7項目について「気になる」度合いを、図中の各項目が「気になる」「どちらかといえば気になる」「どちらかといえば気にならない」「気にならない」の4択で質問している。「気になる」というのは、効果に関する直接的な質問ではないが、当該手段の「効果」を一定程度信じているからこそ「気になる」といえるのであり、その意味で「効果信頼」を示すデータと言えるだろう。図3で傾向を概観しておこう。

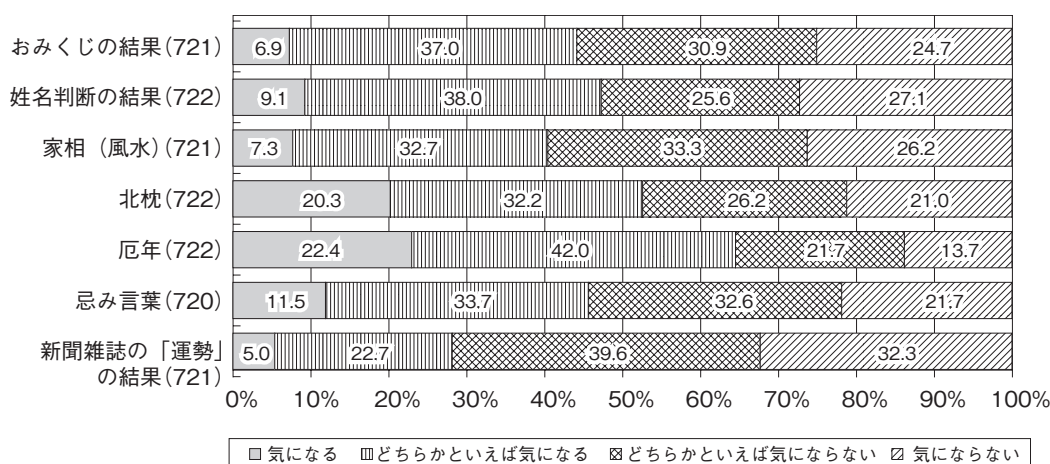


図3 「気になる」度合い

図3の内、「気になる」「どちらかと言えば気になる」をあわせた肯定派が過半数に達しているのは、「北枕」と「厄年」である。肯定派が4割台に達したのは、「おみくじの結果」「姓名判断の結果」「家相・風水」「忌み言葉」であり、「新聞雑誌の運勢欄」以外はすべて、気になるかどうかについての肯定派が4割を越えているということになる。

## 5. 宗教的基礎観念（コスモロジー）と効果信頼の相関関係

さて、図1で見た「基礎観念」の信仰と図2の「効果信頼」とはいかなる関係にあるだろうか。関連の大きさを、ケンドールの順位相関係数  $T_b$  で測定した。その係数を一覧にまとめたものが、表2である。



$\tau_b$ のとりうる値の範囲は-1から+1であり、2変数間が無関係の場合0となる。+1に近いほど正の相関、-1に近いほど負の相関を示す。正の相関とは、たとえば「自然の霊の存在可能性を肯定するほど、禁欲の効果を肯定する」というものである。(表2では、係数の上位2つに網をかけた。)

表2 基礎観念と効果信頼の相関関係 ( $\tau_b$ )

		祈願効果					
		禁欲	応中 援継	絵馬	念仏	お祓い	呪い
宗教的基礎観念	運の良し悪し	0.203	0.077	0.193	0.259	0.271	0.217
	ご縁の有無	0.228	0.084	0.234	0.300	0.300	0.255
	縁起の良し悪し	0.266	0.157	0.286	0.344	0.389	0.266
	転生	0.230	0.175	0.290	0.296	0.313	0.356
	虫の知らせ	0.269	0.115	0.312	0.323	0.329	0.282
	直感	0.223	0.077	0.203	0.223	0.234	0.204
	自然の霊	0.336	0.162	0.312	0.383	0.355	0.347
	守護霊	0.329	0.179	0.392	0.434	0.451	0.401
	神や仏	0.281	0.161	0.322	0.447	0.401	0.277

結果はすべて正の相関、つまり一方を肯定するほど他方も肯定する、という関係にある。

すべての関係が $\chi^2$ 検定で有意であるが ( $P < .01$ )、結果を見ると、「運や縁」、「縁起の良し悪し」、「虫の知らせ」、「直感」など伝統的宗教行為と直接に結びつかない諸項目とは、相対的に関連が強いとはいえない。他方、「転生 (生まれ変わり)」や「自然の霊」、「守護霊」、「神や仏」などいわゆる「霊魂」に関わる諸項目との関連は相対的に強く、とくに「守護霊」は、「祈願効果」の可能性に関するすべての項目と高い相関を示した。上記の表中の最も高い相関を示したのは、「守護霊」と「お祓い」の関係 ( $\tau_b = 0.451$ ) である。

「守護霊」以外で第1位の相関の強さを示したのは、「自然の霊」と「禁欲」効果、「神や仏」と「念仏」効果との関係であった。

アニミズム観とつながる「自然の霊」は、表中では3位に位置することも多く、全体として高い相関を示している。

## 6. スコア化による試論

ここで、本稿が目指す3要素 (観念、効果、実践) の関係を把握するため、関連する項目をスコア化してひとつにまとめてみたい。

はじめに、宗教的基礎観念の肯定度について大まかな傾向を把握するため、図1で見た「運の良し悪し」「ご縁の有無」「縁起の良し悪し」「虫の知らせ」「直感」「転生」「自然の霊」「守護霊」「神や仏」の9項目をスコア化してみよう。結果をまとめたものが図4である。

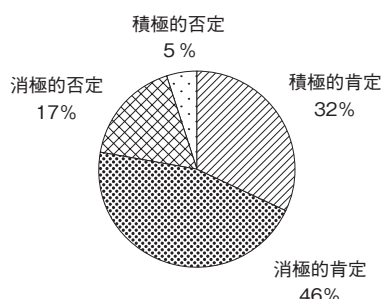


図4 基礎観念の存在可能性信仰スコア  
(n = 723)

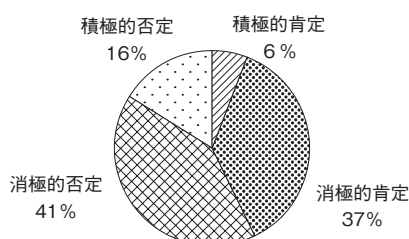


図5 呪術の効果信頼度スコア

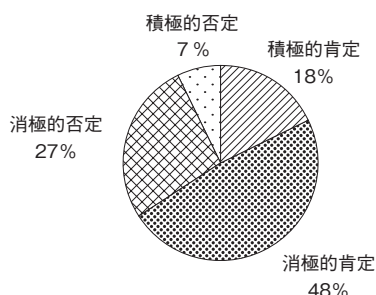


図6 行為実践スコア

一見して、積極的肯定と消極的肯定とを合わせた肯定派が多い（78%）ことが見てとれる。宗教的な基礎観念の存在については、多くの人がある存在を信じる傾向にあるとすることができるだろう。

第二に、「効果信頼」についてスコア化してみよう。図2で見た「禁欲」「生中継応援」「絵馬奉納」「念仏」「お祓い」「呪い」の6つの呪術的行為は、それぞれ質的に異なるものではあるが、その効果への信頼を4段尺度で統一的形式的に質問しており、大まかな傾向をつかみやすい。そこでこの6つの行為に関するデータをスコア化した結果をまとめたものが図5である<sup>8</sup>。

結果を見ると、基礎観念とは逆に、全体として積極的否定と消極的否定を合わせた「否定派」が多い。しかし消極的否定は、何らかの点で祈願の効果の存否に迷いながら傾向として否定に傾いているにすぎず、その点で何かしら効果を「感じている」のだとすると、積極否定の16%のみが明確な「非呪術」的態度と言える。

別の言い方をすると、消極的肯定と消極的否定をあわせた78%は、「半信半疑」ながらある種の祈願に効果を認め、またある種の祈願の効果を否定しているといえる。不十分な形ではあるが、本データから8割近い人が「半信半疑」なまま呪術を選別し効果を認めている現実を垣間見ることができる。

そして第三に、行為実践についてスコア化してみよう。MGC・IIの調査で「行為実践」について直接尋ねたのは、以下の項目である。節分での「豆まき」

や「豆食」、「仏壇や神棚へのお供え」「墓参りでの祈願」、お守りの「購入」や「贈与」、「被占体験」、「おみくじをひく」「家相・風水の実践」「神社仏閣の前での合掌」「新聞雑誌の『運勢欄』閲読」「テレビの占いコーナー視聴」「葬式後に塩でお清め」の計13項目である。ここではこれら個々の項目について検討するゆとりはないが、その全体的傾向について簡単に触れておこう。基礎観念や効果信頼と同様に、行為実践についてもスコア化し<sup>9</sup>、結果をまとめたものが図6である。

前記13項目すべてについて「する」「毎日する」と、行為実践に全面的に積極的肯定を示

した人は、723人中1人だけであった（「ときどきする」といった消極的肯定は含まない、積極的肯定のみの数値である。なお無回答は除いて計算）。他方で、全ての項目の行為を「しない」と回答した全面的な否定者も、無回答項目を除外して考えると、723人中8人にすぎない（「あまりしない」などは含めず）。もちろん、これら極端な全肯定や全否定のすぐ隣に、それに近い「ほぼ全肯定」や「ほぼ全否定」というべき回答をした人がいるにはいる。しかし、呪術的行為は「なんでもする」または「全くしない」という一貫した態度が純粹な形ではほとんど見られないことを、このデータは示しているだろう。

## 7. 〈観念—効果—実践〉の首尾一貫性

以上、MGC・Ⅱの調査結果をもとに、呪術の基礎観念への信仰、呪術に対する効果信頼、呪術の行為実践の三要素にかかわるデータをごく簡単に概観し、観念、効果、実践の3要素について大まかな傾向を知るための暫定的なスコアを作成した。以下ではこのスコア値を用いて、合理性ないし非合理性の実体的把握から離れ、3要素の首尾一貫性について試論的な考察をしてみたい<sup>10</sup>。3要素のスコア値をクロスした結果が図7である。

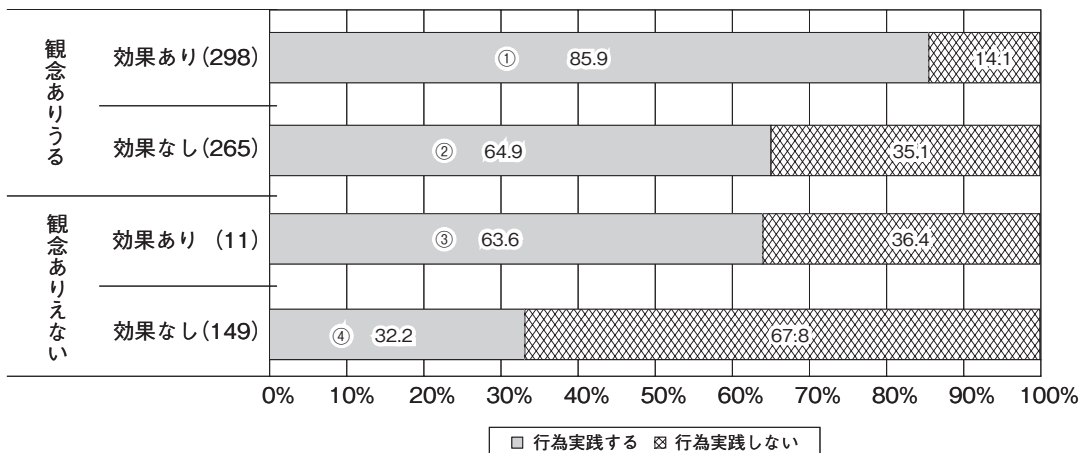


図7 基礎観念スコア×効果信頼スコア×行為実践スコア

項目の上から順に、特徴を概観しよう。

まず、基礎観念を肯定している場合から検討する。①運命や自然の霊や守護霊や神や仏などの基礎観念を「ありうる」と肯定し、呪術的行為も「効果あり」と認める場合は、自分でも実際に「実践する」という実践タイプ（＋，＋，＋）が85.9%と圧倒的に多い。これは、もっとも首尾一貫した態度で呪術的な事柄に親和的・肯定的であり、実践の度合いがもっとも高いタイプである。②他方、基礎観念の存在可能性を認めつつも、呪術的行為の効果には総じて「効果なし」と判断する場合には、実践する傾向（＋，－，＋）が64.9%と2割も小



さくなる。効果を信用していないと、実践度が下がることを表している。

③しかし、効果を信用していれば実践する度合いが高まるかのといえば、必ずしもそうではない。効果があるとする場合でも、基礎観念に否定的な場合（－，＋，＋）は、②（＋，－，＋）とほぼ同様の実践度合い（63.6％）にとどまる傾向が見られるからである。ただし、このタイプはごくわずか（11人）である。

また、④基礎観念も効果も否定している場合には、実践への動機づけが乏しいためか、実践度は32.2％と最も低い（－，－，＋）。しかし考えてみれば、観念も効果も否定しているにもかかわらず、3割は呪術的效果を実践しているということでもある。その中には、墓参りでの祈願<sup>11</sup>やおみくじなどの「習俗的」行為も入っていると思われるが、観念が実践と結びつくとは限らないことを、このデータは示しているだろう。呪術に関する観念も効果も否定するからといって、実際の場面で呪術的行為をけっこうしているのである。

さてこの三重クロスの結果は、本稿の冒頭で「場合分け」をした表1に即して出したものである。そこで、帯グラフ（図7）のそれぞれの値の「肯定」を「＋」に、「否定」を「－」に置き換え、先の表1の形式で示すと以下の表3のようになる。

表3 首尾一貫性のデータ構成

基礎観念	効果信頼	行為実践	人数(人)	割合（／723）	割合の順位
＋	＋	＋	256	35.4%	1
		－	42	5.8%	6
	－	＋	172	23.8%	2
		－	93	12.9%	4
－	＋	＋	7	1.0%	7
		－	4	0.6%	8
	－	＋	48	6.6%	5
		－	101	14.0%	3

表3を踏まえて、あらためて「首尾一貫性」の度合いに着目して整理してみよう。首尾一貫している（「合理的」といえる）上位3位は以下のとおりである。

第1位……観念も効果も実践も、すべて肯定するタイプ（＋，＋，＋）。全体の約3分の1。

第2位……観念は肯定するが、効果には否定的であり、しかし実践はするタイプ（＋，－，＋）。全体の約4分の1。

第3位……観念も効果も実践も、すべて否定する場合（－，－，－）。全体の約7分の1。

（＋，＋，＋）と（－，－，－）という「形式的」に首尾一貫した合理的タイプが上位に入った。しかも両者をあわせると49％となり、全体の半数をしめていることが分かる。観念・効果・実践の「組み合わせ」による基準から判断するこの首尾一貫した「合理的」なタイプは、神や仏、守護霊などの存在を信じ、術（手段）の効果も信じた上で「呪術的」行為を遂行している（あるいは、観念も効果も信じず実践もしない）と考えられる人びとで、理

解しやすい。

では、24%をしめて第2位となった(+, -, +)はどうだろうか。すなわち、呪術の効果にのみ否定的で、神や霊魂などの観念の存在は肯定し、かつ実際に自分で実践している人びとのタイプである。ここに見られるのは、伝統的に継承されてきた、あるいは新たにメディアをとおして浸透してきた霊魂観や神観念などは素直に受容するが、しかし現代に支配的な科学的世界観からすればその効果には信頼を寄せることもできず、にもかかわらず、せっかくだからちょっとやってみよう、と試みるようなタイプと考えられるのではないだろうか。このタイプは、世界観としては呪術的なものを受容する素地はあるが、同時に呪術の効果を否定する(おそらくは科学的な)世界観により信頼を置いており、自己の利益にかなう可能性には世界観と矛盾していてもチャレンジするという、ある種の現実対応的な積極性を示している。理念よりも現実利害に立脚するタイプといえる。

他方、首尾一貫しているとは言い難い、下位3位は以下のとおりである。

第6位……観念と効果は肯定するが、実践はしないタイプ(+, +, -)。

第7位……観念は否定するが、効果は肯定し、実践もするタイプ(-, +, +)。

第8位(最下位)……観念を否定するが、効果は肯定し、実践はしないタイプ(-, +, -)。

下位3つを見てみると、観念と実践を否定、観念のみ否定、実践のみ否定の3タイプに分けることができる。ただし8位と7位の全体に占める割合はきわめて小さく、合計しても全体の2%にも満たない。観念を否定した場合には効果を肯定する人がきわめて少ない(逆に、観念を肯定しても実践に及ばない人は2割近い)ことが関係したと考えられる。(-, +, ±)はあわせてわずか11人である。

首尾一貫性の順位で最下位の(-, +, -)は、第2位の(+, -, +)と形式的には同じ(ABA)型であるが、量的にはまったく逆の結果となった。神や仏や霊魂や守護霊など宗教的基礎観念についてその存在を否定する人の割合が、肯定する人よりも少ない傾向にあることが大きく関係していると考えられる。基礎観念の存在を否定した場合の多くが、呪術の効果にも否定的であるという傾向が、浮かび上がってくるだろう。(ABA)型が2位と8位の両極に分かれた背景には、伝統的な基礎観念の浸透の根強さと、呪術の実践へと向かわせるプラグマティックな現実打開精神があるのかもしれない。

## 8. 「呪術」に対する意識と行為 — 「合理性」の非実体的把握

本稿は、従来の意識調査の質問項目ではあまりデータを収集できていなかった、宗教的行為における「手段性」(「術」性)に着目してその実態を把握するとともに、基礎観念、効果信頼、行為実践の三要素に分けて、それら三要素の関連を考察するという方法的な「合理性」の基準について検討してきた。

データからうかがえる興味深い点をいくつか振り返っておきたい。

まず、「呪術」的な事柄に関連してそれを基礎づける観念については、「運の良し悪し」や「縁起の良し悪し」などのいわば摂理信仰に近い形態について比較的多くの人が肯定している。しかしむしろ「生まれ変わり」や「自然の霊」や「守護霊」などの霊魂観に関わるもの、あるいは文字どおり「神や仏」という救済者信仰に関わるものの方が「呪術的」行為との相関関係は強いという傾向が見られた。

また「呪術」の効果については、「念仏」と「お祓い」が基礎観念との相関が他に比して強く見られ、さらに両者を比較すると、「お祓い」の方がより強い相関を示す。「念仏」はそもそも「術」を起源とはしていないのに対し、「お祓い」は当初から「術」としての性格をもっていることなども影響するだろうが、他の関連も考慮すると（たとえば仏壇の所有と神棚所有について見ると、神棚を所有している人の方が呪術に親和的であるというデータが出ている<sup>12)</sup>、神道系のエートスの方がより呪術に親和的であると言えるのかもしれない。

また三要素が首尾一貫している（＋，＋，＋）のタイプが第一位になり、同様に首尾一貫している（－，－，－）が第三位に位置したことは興味深い結果と言える。しかしこれをもって社会の二極化と見ることは、第二位が（＋，－，＋）であることを踏まえるなら、控えねばならないだろう。（＋，－，＋）のタイプは、効果は信じていないが、基礎観念の存在を信じ、実践もするといういわば伝統主義的な傾向であるとも見られる。この場合、古くから継承されてきた霊魂観や摂理観が継承される一方で、実践の場面では効果にあまり信憑性を感じなくても「可能性」があるのなら試しておいて損はない、というプラグマティックな態度であると考えられるだろう。

このように見てくると、「呪術」への親和性も多様であることが、ネガティブな「非合理」という価値付与から離れて分析可能になってくるように思われる。その際には、首尾一貫していて理解しやすく見える（＋，＋，＋）や（－，－，－）の「合理的」な傾向についても、性差や年代差などとの個別的な検討を加えることが必要である。また、中間形態あるいは「半信半疑」なまま揺れ動いているタイプについては、その揺れの要因を探るいっそう詳細な検討が必要である。たとえば「禁欲」や「お祓い」など「効果信頼」の6項目すべてについて積極的に効果を否定している44人を見てみると、基礎観念の肯定派が16人、行為実践をする人が12人おり、効果の「全否定者」が必ずしも「呪術」と無関係な位置にいるわけではないことがわかる。そうした詳細な検討は、別稿で重ねていくことにしたい<sup>13)</sup>。

「呪術」的な事柄は、ときに啓蒙して排除すべき「非合理」な事柄として、あるいは逆に異様な力をもって現実を打破する「非合理」な魅力として、状況によって正反対の対応がされることも多い。観念や効果への意識は、実際の行為とどのように関連するのか。現代社会における「呪術」への意識と行為について、質的データの蓄積とともに、量的データによる方法的合理性の面からの検討も重要だと思われる。

## 注

- <sup>1</sup> 調査概要は以下の通り。A.調査主体は、筆者も参加している生活意識研究会（代表：宇都宮京子教授（東洋大学））。B.調査対象集団：東京都23区在住の20歳から79歳までの男女。C.標本抽出法：二段無作為抽出法。D.標本数：1,200サンプル。E.回収率：60.3%（724サンプル）F.実査方法：調査員による訪問留置法。G.実査の期間：2006（H18）年1月13日から同年1月22日までの10日間。H.調査票：総質問数77問。質問の詳細は、平成16～平成18年度科学研究費補助金（研究代表者：宇都宮京子）研究成果報告書『現代社会における『呪術』の意義と機能について』（2007年3月）を参照。
- <sup>2</sup> 石川栄吉ほか編『文化人類学事典』弘文堂、1994、p.354。項目執筆は吉田禎吾。マックス・ヴェーバーの「神強制」概念も、手段性に着目する基本的含意は同様である。
- <sup>3</sup> こうした問題は、従来の「信仰」に焦点をあてがちだった新聞社等による意識調査の一環としての宗教項目（「あなたは宗教を信仰していますか」「神や仏や霊魂は存在すると思いますか」などの質問）では、必ずしも明らかにされ得ない。他方、具体的事例に深く入り込んだ調査では、東京という現代の大都市の大きな傾向を調査することは難しいだろう。
- <sup>4</sup> 19世紀から20世紀初頭の世紀転換期に立てられた、宗教・呪術・科学の三分法概念形成史については、藤原聖子『「聖」概念と近代一批判的比較宗教学に向けて』大正大学出版会、2005年。とくにその第4章「〈宗教・呪術・科学〉三分法の成立と合理性—呪術論におけるデュルケムとオットーの位置」を参照。
- <sup>5</sup> とはいえ、これら三要素に着目することによる限界もある。そもそも、呪術的行為を基礎づける観念など確定できるのか疑問が残るし、「観念」から「効果」へそして「実践」へという意識の連続性を一方向的に設定してしまうと、それはきわめて硬直した人間像になりかねない。けれども観念、効果、実践の関係を一方向的ではなく、それらの肯定や否定の一致／不一致の組み合わせで考察するならば、思考モデルとして一定の意義があるのではないか。もとより三要素そのものの設定とその個別の選定は暫定的なものでしかない。合理性の実体的把握を相対化し、呪術と合理性の一体的思考を批判する試論として位置づけておきたい。
- <sup>6</sup> 無回答は除外して集計した。
- <sup>7</sup> スコアの算出は、Q18A～Iの9項目について「1. ありうる」（積極的肯定）を1点とし、順に「4. ありえない」（積極的否定）の4点まで各項目を得点化し個人ごとに合計した。したがって「運の良し悪し」から「神や仏」までの9項目すべてについて「ありうる」とした「全肯定」は9点、すべてについて「ありえない」とした「全否定」は36点となる（724人中「全肯定」は47人、「全否定」は9人、全て無回答1人であった）。その上で試論としての便宜上、9～15点を積極的肯定、16～22点を消極的肯定、23～29点を消極的否定、30～36点を積極的否定とする。
- <sup>8</sup> スコアの算出は、6項目について、「1. 効果がある」（積極的肯定）を1点とし、順に「4. 効果は全くない」（積極的否定）の4点まで各項目を得点化し、個人ごとに合計した。したがって、「禁欲」から「呪い」までの6項目すべてについて「効果あり」とした「全肯定」は6点、すべてについて「全く効果なし」とした「全否定」は24点となる（723人中、「全肯定」は4人、「全否定」は44人であった）。そしてあくまで便宜上の数値として、6～10点を積極的肯定、11～15点を消極的肯定、16～20点を消極的否定、21～24点を積極的否定とした。
- <sup>9</sup> スコアの算出はこれら13項目を対象とし、「1. たいていする（または毎日する）」（積極的肯定）を1点とし、順に「4. 全くしない」（積極的否定）の4点まで各項目を得点化し、個人ごとに合計した。上記13項目の中には、選択肢が「する／しない」の2択の場合と、「たいていする／たまにする／ほとんどしない／全くしない」といったような4択の場合（Q14）とがあるが、二択は1点と4点に分かれることとなる。したがって、13項目すべてを「する」とした「全肯定」は13点、すべて「しない」とした「全否定」は52点となる（ただし、無回答は0点とする。そのため仮に13点でも、無回答がある場合には全肯定ではない）。その上で、あくまでも便宜上の数値として、13～21点を積極的肯定、22～32点を消極的肯定、33～42点を消極的否定、43～52点を積極的否定として算出した。
- <sup>10</sup> また、3要素の関連の強さについて相互のφ係数は、値の高い関係から順に、観念スコア×効果スコアについてφ=.386、観念スコア×実践スコアについてφ=.367、効果スコア×実践スコアについてφ=.337であった。スコア値はいずれも暫定的なものにすぎないが、φ係数はいずれも同様の高い値

を示しており、その限りで三者は相互に強く関連しているといえそうである。具体的に見ると、もっとも高い値は、基礎観念と効果信頼の関連である。また、実践との関連が強いのは、効果信頼よりも、基礎観念の肯定であるという結果は興味深い。効果の有無は、いわば「やり方次第」であり、場合によっては効果がないことの責任は本人に向けられ得るからだとも考えられる。むしろ、まずは呪術的行為に関わる観念を肯定しているか否かが実践につながると見ることもできるかもしれない。

<sup>11</sup> 墓参は故人の冥福を祈る場と考える立場があるし、それが「正統」な見解であるともいえようが、実態として、生きている「自分や家族のため」に墓前で祈願をしたことがある人は6割以上であった(64.9%)。詳しくは、前掲『研究報告書』、101～107頁参照。

<sup>12</sup> 前掲『研究報告書』79～87頁参照。

<sup>13</sup> 本稿では紙幅の都合により、たとえばジェンダー差や年齢差などとの関連などについて触れることはできなかった。今後の課題である。

(あらかわ としひこ 本学非常勤講師)